

宰府画報

第 13 号

2022 年 7 月
(令和 4 年)

発行
太宰府市教育委員会
文化財課



バックナンバーはこちらから

調査見聞

『艸名集』の絵師

齋藤秋圃生誕250年特集(2)

齋藤家に伝わった画稿などの史料は、秋圃の履歴や画業の解明に多くの手がかりをあたえています。かれの生年、地誌や肖像画制作への意欲もこれによって知ることができました。ここではもうひとつ、かれの画業に光をあてた例をご紹介します。

画譜を称する句集

『艸名集』は野辺や畑の植物の名にちなむ発句をあつめた句集です。書物の内容を説明する角書には「名家画譜」とあり、高名な絵師の手になる画の掲載を強調しています。秋



『艸名集』秋之部 (福岡大学図書館蔵)

むかつて右頁に我亦香図など、左頁第一行に、すずだま(数珠玉)や月にすかせは帚星「秋甫」

之部、夏之部、春冬之部の順で、文政年間に名古屋の俳人によってつくられ、その地で出版されました。

およそは見開きの左右頁それぞれに、ひとつふたつの植物を大きく描き、発句はその余白を埋めています。画の多くは、疎密もありますが、花、茎や葉などその植物の特徴を実物に違わず描こうとしているようです。発句の作者は芭蕉はじめ古今の人々、在所は陸奥から薩摩まで日本各地に及びます。

今日に伝存する『艸名集』のなかで、東京国立博物館所蔵本の秋之部の目録には14人の絵師の名があり、我亦香や雀麦など19図を「秋圃」が担当したと記されています。また「秋甫」の発句が、全巻あわせて9句収録されています。

秋圃と秋甫と、齋藤秋圃

この「秋圃」と「秋甫」が齋藤秋圃であるか否か。残念ながら否定的意見が優勢です。その理由は、齋藤秋圃には縁のない名古屋での編纂出版、目録の絵師のうち事跡の確認されるのはみな名古屋ゆかりの人。しかも名古屋には、画業は不明ですが、少なくとも俳号を「秋甫」とした人物がいたとの報告もあります。さらに従来、齋藤秋圃の作品において



《植物鳥魚類写生帖》部分 (齋藤家資料)

植物は背景や脇役であつて、それが主題とされた例は知られていません。

しかしながら、目録の絵師には「日光山下」の人もあり、齋藤秋圃と親交のあつた僧豪潮もすでに文化年間には名古屋在住です。そして何より齋藤家の画稿にふくまれる植物の詳細な写生図から、植物を写すことに秋圃がいかに強い関心を抱いていたかがわかります。

今後の研究に託して

意見の優劣逆転には至りませんが、齋藤家の植物写生図を知った今、『艸名集』も秋圃の画業として拾いあげる余地は残しておくべきではないかとおもいます。

齋藤秋圃研究はここ数年で格段の進展を果たしました。しかし、かれが謎に満ちた人物であることに変わりはありません。今後も史料を集め、検討をかさねることが必要です。

(小林法子)

主な参考文献

- ・金子明代「大鶴庵塊翁撰絵人俳書『名家画譜艸名集』について」愛知県立芸術大学紀要49
- ・橋富博喜「齋藤秋圃研究1・2」年報太宰府学6・7

メイショ

太宰府天満宮参道

吉嗣梅仙は、幕末の慶応3年(1867)、天満宮の境内絵図を制作しました。これによると、参道に「櫻馬場町」と記されています。江戸時代、参道には桜並木がありました。尾張国の商人菱屋平七(吉田重房)は、享和2年(1802)に太宰府を訪れ、その時の様子を紀行文『筑紫紀行』巻7に記しています。参道については、「二の鳥居を入ると、桜の馬場」といって、道の左右に桜の木が多数植えられている。弥生(旧暦3月)の頃はさすすばらしいものであろうと思ひながら、青葉の梢をぼんやり見つめた「など」と述べています。



吉嗣梅仙筆《天満宮境内絵図》部分 (太宰府天満宮蔵)

江戸時代に描かれた肉筆の境内絵図は、梅仙筆以外に2点ありますが、どちらも桜並木が道の両脇にびっしりと描かれています。ところが梅仙筆の境内絵図には、参道の北側に3本、南側に5本しか描かれていません。理想的に描くなら、桜が立ち並ぶ様子を絵にするでしょうから、これは当時の実際の状況を反映したのかもしれない。(朱雀信城)

逸品探訪

太宰府の絵師に関連する逸品・名品を紹介いたします

吉嗣鼓山、萱島秀山、中垣椋山、平島古儼、瓜生涓泉、天本基峰作

【梅仙門人寄合画賛】

お洒落なデザイン

画面の中に設けた6つの枠「巻物、冊子、掛軸、扇面、額、芭蕉の葉」の中に、それぞれ異なる作者が書や絵をかけた作品です。各画面に記された署名から、筆者は吉嗣鼓山、萱島秀山、中垣椋山、平島古儼、瓜生涓泉、天本基峰の6名だと確認できます。絵の中に絵があり、その絵の中の掛軸にも絵が描かれていて、デザイン的に凝った趣向となっています。

吉嗣梅仙没後40年の記念作

画面最上部の巻物型の枠の中に書かれた鼓山の書に、吉嗣梅仙の没後40年にあたる昭和9年に、鼓山の祖父吉嗣梅仙の門人一同で遺墨展覧会を開いたことが記されています。吉嗣家資料中にある藤瀬冠郎（梅山の弟子）が記した古詩（参考写真）には、

（参考）藤瀬冠郎《七言古詩》

「萱島秀山瓜生涓泉天本基峰平島古仙中垣梅山諸氏」が、「福岡県物産奨励館」で遺墨展を開いたと書かれており、本作品はこの展覧会の記念に梅仙を偲んで作られたものと思われる。

昭和初期の地元絵師たち

秀山は吉嗣家と同じく太宰府の絵師として活躍した萱島家の2代目で、古儼は朝倉椋山は小郡、涓泉は嘉穂の人であったと伝われます。基峰については、基山を連想させるので佐賀の人かもしれませんが、現在探索中です。基峰について、また他の作者について何かご存じの方がいらっしゃいましたら、ぜひとも情報をお寄せください。（井形栄子）



絹本着色 掛幅装 124.9 × 43.5cm 昭和9年（1934）吉嗣家資料



（上）萱島秀山 書斎図 梅仙の画室をイメージしたものでしょうか。



（右）瓜生涓泉 梅雀図

いちまい 画稿鑑賞

齋藤家資料

【しとどの窟図】



紙本墨画 86.9 × 112.4cm

ふたりの武者が何やら話し合い、画面左方向の小鳥を見ている。その様子を画面右から数名が窺っており、中には兜をかぶった武者も見えます。

これは鎌倉時代が始まる直前、打倒平氏の兵を挙げた源頼朝が、石橋山の戦いに敗れ、山中の洞窟に潜んでいる所を、敵方の梶原景時が見逃したため九死に一生を得たという場面を描いたものです。景時は洞窟に隠れる頼朝を見つめますが、武士の情けか自分の出世のためか、洞窟から出てくる「しとど」と呼ばれる小鳥を見て、「ここには誰もいない」と搜索を中止させました。命拾いした頼朝は、その後勢力を拡大し、平氏討伐、鎌倉幕府樹立を果たし、景時は侍所所司を任せられます。

こうした鎌倉幕府創設にまつわる故事は江戸時代には広く知られており、絵馬等の絵画作品として描かれていました。この画稿もどこかの作品を模写したもの、あるいは絵馬の下絵として描いたものでしょう。（木村純也）

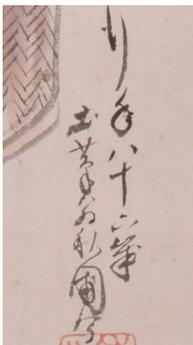
ひとこと ぐずし字

【行年】

今回はこれまで何度か解説してきた、書画作品の署名に関する字を紹介していきます。

「行年」といい、この

の続きに作者の年齢が書かれることで、作品完成時の年齢を判断する材料になります。字を見ますと、



「行」はイが縦線に点が二つ、「年」は縦線一本になり、二画くらいに省略されています。「年」は漢字の「手」のように崩されています。ここでは「行年八十六歳／土筆翁秋圃写」と書かれており、齋藤秋圃が86歳の時にこの作品を完成させた

点が一、二画くらいに省略されています。「年」は漢字の「手」のように崩されています。ここでは「行年八十六歳／土筆翁秋圃写」と書かれており、齋藤秋圃が86歳の時にこの作品を完成させた



《齋藤秋圃自画像》 齋藤家資料